

新資料 山村暮鳥『虹とさくらんぼ』序文原稿および

関連資料（暮鳥会寄贈資料）・翻刻と解説

竹本 寛秋

本自筆資料は、山村暮鳥夫人土田富士氏の旧居解体の際に、新たに見つかり暮鳥会に寄贈されたものである。本稿では、『虹とさくらんぼ』の序文原稿および編集指示書、ハガキ、トビラ原稿など関連資料を翻刻し、資料として示す。

『虹とさくらんぼ』は、山村暮鳥を選者とし「児童の模範作品・童謡自由詩」を示すことを企図した本である。茨城県教育会が発行していた雑誌『課外の友 旭』の掲載作を、山村暮鳥が更に厳選し、それに加えて「いばらき新聞」掲載の童謡（選者・森田麥の秋）を併せて一冊としたことが「序文」から読み取れる。指示書などを見る限り、出版の最終段階まで進んでいたと考えられるが、現存する刊行物は確認できないため、実際に刊行されたかは不明である。

『課外の友 旭』は茨城県教育会が大正一一年四月に創刊した児童雑誌である。前半が読み物、後半が児童投稿作品で構成され、「綴り方、図画、童謡、短歌、俳句、自由研究、何でも？」の投書を募集している。

『旭』大正一三年三月号の「編集室から」には、「童謡が動揺して来たのを嘆いて、山村先生は近く標準童謡、模範童謡集を出すそうです」とあり、『虹とさくらんぼ』を指すと推測できる。山村暮鳥自身も大正一三年五月、「いま自分も某県教育会の囑託をうけて、それ「童謡界」の「危

機」を救い出すこと…引用者注」に着手してをります」と記している。これら記述から、大正一三年三月以降編集作業が続けられていたことがわかる。ただし、暮鳥は大正一三年一二月に没しており、そのために刊行が頓挫した可能性もある。

茨城県教育会は、明治四一年、茨城県の教員の研修・研究団体が大同団結して発足した教育団体である。雑誌『茨城教育』を発行し、また、講習会の開催などを通して茨城県の教員の資質向上をめざすことを目的に掲げ、現在まで活動を続けている。その茨城県教育会の『創立百周年記念誌 茨城県教育会』³には『虹とさくらんぼ』刊行についての記述はない。

『虹とさくらんぼ』の編集・刊行において、中心的役割を果たしたとみられる人物が長岡襄である。彼は『旭』編集局の一員であり、『旭』誌上で、「長岡北斗」「北斗星」の筆名で短歌、童謡の選者をしているほか、自作の童謡や小文も掲載している。彼はまた、山村暮鳥・横瀬夜雨・野口雨情監修の雑誌『郷土』（水戸・郷土芸術社発行）にも詩を掲載しており、水戸を拠点として活動した詩人・教育関係者であることがわかる。⁴

森田麥の秋は茨城を拠点として活動した詩人・歌人（のち、茨城県八原村村会議員、村長、教育委員長など歴任）であり、「郷土童謡集」と銘打たれた『夢くばり』（学芸研究社 大正一二年四月）では山村暮鳥が序を書くなど、暮鳥との交流がみられる。⁵

先述した『旭』大正一三年三月号「編集室から」が指摘する「童謡が動揺して来た」という言葉が示す事態とは、大正一一年以降『常総新聞』を舞台に繰り広げられた野口雨情と横瀬夜雨の論争と、それに伴う茨城県教員の作文指導方針の混乱と考えられる。

暮鳥は大正一三年五月の『揺籃』に「純真、無邪気、快活、健康、堅実、かう云うものの片鱗でもありませんか。あのセンチメンタリズムと都会病、小細工、粉飾、どこにこの大自然の愛や力のおもかげでもありませんか。でなければしみつたれた端唄もどきの亡国歌だ。／こんなことから、あの単調な小学唱歌の方がどんなにいいかとおもはれるまでになつたいまの童謡界——どうか、しつかりやつて、この危機からそれを援ひ出してください。／お互いの使命です。／いま自分も某県教育会の囑託をうけて、それに着手してをります」と述べている。『揺籃』は、岡山県で安藤源吾が出していた詩と童謡の雑誌であり、この時期、暮鳥が「都会」との対立、「大自然」との関係において童謡運動の意義を考えていたことがわかる。「都会病」という言葉は同時期の書簡などにもみられ、「都会病はかうもうとやらにはいつてゐるんだ。」、「一東京のために、日本全土を吸ひ枯らしてしまふがいい」と「土を忘れたひとびと」⁽⁷⁾に対する批判が語られている。

本資料は、暮鳥の童謡観が示された資料であると共に、茨城の文芸界と山村暮鳥の関わりを示す資料といえる。

本資料を含めた新出資料については、拙稿「山村暮鳥の自筆資料をめぐって——草稿、創作ノート、説教メモ」(『日本近代文学』第九二集平成二七年五月)も併せて参照されたい。

凡例

・漢字は可能な限り原稿の字体に従った。旧仮名遣いはそのままとした。

・注記事項は(〜)内に記した。

・判読不明のものは■で示した。

・抹消部分は記載した上で取消線(――)を記した。

・挿入部分は「」内に記した。語句の入れ替えについても同様に処理した。

・複数枚に渡る場合、原稿用紙の区切り目は「:」で示した。

・文の開始前の原稿用紙空行は反映したが、終了後の空行は削除した。

1 山村暮鳥、長岡襄宛ハガキ

〈官製一銭五厘はがき 消印なし ペン〉

水戸市

仲町 農工側

長岡襄様

「虹とさくらんぼ」の原稿大々至急 お送り

ください。すぐまた、お返ししますが。それとも
お写しになつておくつてくださつてもいい。それ

ならそれで原稿紙へあのとほりにかいてください。
いづれにしろ大々至急 たのみます。

なんで? それはお目にかゝつてはなします。

インハマにて

山村生

2 長岡襄苑編集指示書

へかげやま製原稿用紙 赤罫 縦二〇横一〇 ペン

長岡さん

その後例のものはどんな運びになつてゐますか。

表紙の字を封入しました。長女にかかせ

たものです。

トビラの裏へ かうならべてください。「あの中へ」作曲家を入れるのです

■装 禎 南 薫造

音楽学校教授

作曲 牛山 充

表紙の字 ……

土田玲子

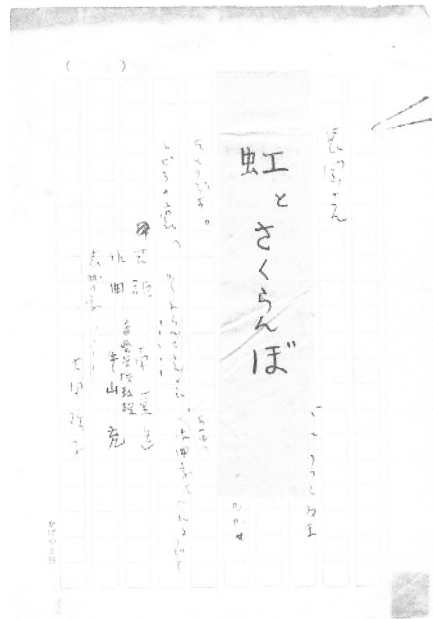
(注1)「……」は肩書の省略を示すと考えられる。5の資料に対し、「

作曲家」を挿入した際のイメージを伝えるための記述とみられる。

(注2) 本原稿用紙には、四行目に言及のある「表紙の字」に当たるとみられる「虹とさくらんぼ」題字(暮鳥の娘、土田玲子氏筆)が糊付け

されている(図)

図



3 長岡襄苑編集指示書

へ松屋製原稿用紙 セピア罫 縦二〇横一〇 ペン

「一行アキ」

終りに——ここに一ふで録しておきたいの

は、「旭」の編輯「」長岡北斗星氏のかくれたる熱

意とお骨折とであります。もし、それが本わ

本の「ために」「それによつて」、この本もかうして日の光のなかにで

「られるようになったので。」

「「は」でまなかつた「かも知れ」に違ひありませんので。

本めい

昨夜は失礼

おかへりになると「すぐ」妻に注意されました、ああして一生懸命な長岡さんのお名前すら その本にはいれずいてない といふのは よくない よくないとなるほど さうでしたね、 いかに あなたが發刊署名人になればとて――

ではどうか この 右の一文を私の序の後に付けてください。

○視学が序文をかいてくれたら私のは

巻尾にしませう

○南君の絵は破棄しないで ください

使用済みになつても

(注1) [7]の後に、長岡襄への謝辞を入れることを指示するもの。編纂主体は茨城県教育会のため、教育行政官が序を書いた場合には自序を巻尾にまわすことを指示している。

(注2) 「南君」は装丁の南薫造を指すとみられる。

[4] 編集指示書

〈かげやま製原稿用紙 赤罫 縦二〇横一〇 ペン〉

この表紙の字は凸版にしてください

(注) [1]から[4]までの資料には、上部、下部に共通する汚れ、粘着テープ跡があり、これらがひとまとめにされていたことが分かる。[1]から[4]までの綴じ穴は右上に二つであり、[5]以降と異なる。[7]の注も併せて参照されたい。

[5] 『虹とさくらんぼ』トビラ原稿

〈松屋製原稿用紙 セピア罫 縦二〇横二〇 ペン〉

茨城県教育會編纂

山村暮鳥撰攥

森田麥の秋撰

虹とさくらんぼ

(兒童の模範作品・童謠自由詩)

装幀の畫 南 薫造

帝展審査員

〔作 曲 牛山 充〕

音樂學校 教授

表紙の字 土田玲子

磯濱校

〔注〕「作 曲」の行は行間に挿入。また、「音楽學校教授」は字の太さなどの質の違いから、後の書き入れとみられる。〔2〕の注を参照。

〔6〕『虹とさくらんぼ』表紙原稿

〔松屋製原稿用紙（推定） セピア罫 縦二〇横二〇 十行目以降欠損ペン〕

茨城縣教育會編纂

山村暮鳥撰

森田麥の秋撰

虹とさくらんぼ

（兒童の模範作品・童謡自由詩）

〔7〕『虹とさくらんぼ』序文原稿

〔松屋製原稿用紙 セピア罫 縦二〇横二〇 ペン〕

撰者として。山村暮鳥「5号〔山村暮鳥〕文字全体への指定」

童謡「や子どもの自由詩」がたいそうさかんになってきました。

それこそ日本はじまつてのことで、わが茨城

縣のごときは全國中でもその最も傑出したもの
です。實に、うれしいことです。そしてま
た、これは現下の兒童教育にとつて、一つの
すこぶる重要な意義をもつものでなくてはな
りません。

だが、かなしいことにはかうしてさかんになつてくると、それがことごとによいものとは
ばかりかぎらぬようになるのです。不純なもの
がいたりこむのです。その結果は、優れたもの
と、さうでないものとの見分けがつかなくな
るのです。

✪「こ」朶「こ」に危険があります。

その危険とは、いふまでもなく、うつくしい
純粹無垢な感情「性」を、どろみづのように濁すこ
とです。

——自分がこの仕事をよろこんでひきうけ
たのも、まつたくかうしたところにその「貴い」使命
を感じたからのことでした。

自分は選者として、まづ、縣教育會の雑誌

「旭」の既刊全部に「ひと」わたり目をとほしました。
それから、そこへあつまつた澤山の寄稿にむ

かひました。嵩からいふなら、それは一脊負ひもあるほどの作品でせうが、それらの中から僅々数十篇をえらみだすのすら自分には容易なことではありませんでした。

いくたびうんざりして腕を組んだかわか~~い~~「しれ」ません。

とはいへ、これだからどうしてもやりとげなくてはな~~い~~「ら」ない。かうおもつて手に残つたものをみると、すぐれたものたふとい理由がはつきりと解~~き~~解りました。敷こそすくないが、みよ、それらがみなことごとく寶石のように光つてゐるではありませんか。

自分は、しかし一さつの可愛い本とするためにもうすこし作品をほしくおもひました。で、そのことをいばらき新聞の童謡選者である森田麥の秋さんにはなしたら、そちらでもおなじ選集の計畫~~す~~「まで」あつたださうですが、「」それでもさつそこころよく承諾してください、すでにあつめられた幾百の秀作のうちから、さらに嚴撰したものをおくつてくださったのです。

それらが天上の星のような一粒選りの逸品

であるのはいふまでもありません。

自分はうれしくつてうれしくつてたまらず「」それと自分の選稿とをふどころにしては二日も三日も、ひまさえあると、■目白や鶴のないてゐる裏の松山をうろつきまはつてすごしました。

この仕事に手をだしたことによつて、自分をはじめ、ほんとうの書~~い~~こんべんを書きかけて削除、「詩」と書くつもりだったか「」天成の詩~~本~~「人間」にあつ

たものです。ああ、なんといつても子どもたちばかりが生れながらの立派な~~人~~人詩人ではありませんか。

自分がかへすがへすも、それをうれしくおもひます。

磯濱にて

山村暮鳥

(注1) 末尾「磯濱にて／山村暮鳥」の削除は、**3**で指示した文を末尾に追加することに伴う修正と考えられる。

(注2) **5**から**7**の資料は、綴じ穴が右上に一つ、右中央に大冊を綴るための穴が二つある。**5**から**7**については、『虹とさくらんぼ』の本文

原稿（暮鳥選の童謡自由詩、森田表の秋選の童謡自由詩）と共に綴じられていたと考えられる。右上綴じ穴は、本資料が土田富士氏に返却された後、**2**から**7**の資料を一括して綴じるために開けられたとみられる。

注

- ① 『旭』本文の引用は、茨城県教育会編集『創立百周年記念誌 茨城県教育会』（社団法人茨城県教育会 平成二年一月）五十頁による。
- ② 山村暮鳥「明るかれ」（『揺籃』大正一三年五月 引用は『山村暮鳥全集 第四卷』（筑摩書房 平成二年四月）六二七頁より）
- ③ 前掲書、『創立百周年記念誌 茨城県教育会』
- ④ 茨城県教育委員会・茨城文化団体連合編『茨城の文学史』（茨城県教育委員会・茨城文化団体連合 昭和五十年十月）二四六―二四八頁。
- ⑤ 『夢くばり』序（森田表の秋『夢くばり』学芸研究社 大正二二年四月 引用は『山村暮鳥全集 第四卷』六二二―六二三頁より）
- ⑥ 前掲、山村暮鳥「明るかれ」
- ⑦ 山村暮鳥、大正二二年一〇月吉野義也宛書簡（引用は『山村暮鳥全集 第四卷』七四九頁より）

附記 資料調査、本文作成に關して、暮鳥会の加倉井東氏、浅井敦氏の協力と貴重な助言を得た。記して謝意を示したい。本研究は JSPS 科研費（課題番号…263370261）の助成を受けた成果の一部である。

（二〇一五年九月二十日 受理）